

## ロシアにおける岩倉使節団と『米欧回覧実記』

### —書かれなかった皇帝午餐会—

坂内知子

国際基督教大学

The Iwakura Embassy, known for its renowned members, the most famous in the modern history of Japan, visited Russia in 1873 in early spring. The official report of the Iwakura mission, “Beio kairan jikki,” written by Kunitake Kume, regrettably has many mistakes on the pages of Russia, and the author did not notice several important matters. First I would like to pick up some misunderstood points in the report, consider the further meaning of them, and try to prove the author’s inclination to ignore the relationship between Japan and Russia. After that, I will examine here the most important unwritten matter, The Imperial Dinner by Alexander the Second, and refer to the role of Prince Oldenburgski in the mission’s visit to Saint Petersburg.

#### 1. はじめに

周知のごとく、明治4年新生日本政府によって欧米12カ国へ派遣された岩倉使節団は、正使岩倉具視をはじめとして木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ら国家最大級の政治家たちによって構成された未曾有の大使節団であった。約1年10ヶ月の海外歴訪旅行の結果として彼らが持ち帰ったものは具体的な外交上の成果ではなく、新生国家日本のその後のオリエンテーションに決定的な影響をあたえた文明論的な経験であったというのが、これまでの岩倉使節団研究のほぼ異論のない見解である<sup>1)</sup>。

『特命全権大使米欧回覧実記』（以下、『米欧回覧実記』、『回覧実記』、『実記』）は大使岩倉具視の秘書として使節団に随行した元佐賀鍋島藩士の和漢学者久米邦武が帰国後執筆し、国民への使節団公式報告書として太政官によって明治11年に公刊された全5冊100巻の画期的な出版物である。もとより岩倉使節団研究のきわめて重大な資料であり、また現在まで岩倉使節団が世に知られる最大の媒体となってきた。

岩倉大使みずからの所望で使節団に加えられた久米は、当初よりその任務に使命感をもって臨み、岩倉大使に随行して見聞したことを出来る限り子細にメモにとった。また、旅行中も行く先々の国について調査勉強し、資料を集めた。帰朝後膨大なメモや資料の整

理復元に努め、『米欧回覧実記』執筆にあたっては日録風にまとめ、訪問先を新たにするとともにまずその国についての解説をおこなっている。従って、『回覧実記』は記述資料としての意義だけでなく、国民への欧米諸国紹介という啓蒙的な意味も持っている。執筆者久米の関心は経世治産にとどまらず、徳川知識人としての教養に裏打ちされた博覧強記の博物学的広がりも見せている。律儀で幾分かペダグティックな漢学風文章のなかで、久米はときに詩情をほとぼしらせる美文をものすることもあり、『回覧実記』はあたかも、日本語という科目をも包摂した全科教科書的な啓蒙的書物となっている。

近年、岩倉使節団研究において『米欧回覧実記』の再評価、再検討の声は世界的な高まりをみせ、2002年には全5巻英訳『The Iwakura Embassy』(Japan Document)が上梓され、ドイツ語圏(ドイツ、オーストリア、スイス)部分の独訳も同年に出版されている<sup>2</sup>。また、2005年には『現代語訳 特命全権大使米欧回覧実記』(水澤周訳注 慶応大学出版会)も世に出て、一層広範な読者を得ることとなった。このように『回覧実記』の内容をスムーズに知りえる状況となったが、訳述の安易な固定化を避けるためにも、原文『回覧実記』のさらに綿密な検証と、岩倉使節団への多角的な研究が必要となるであろう。国内外の研究者によって現地資料を使つての活発な調査が展開され、『回覧実記』記述の正誤、過不足等を検証しつつ、岩倉使節団の実像にせまり、その歴史的意義が研究されている。

本論文では『米欧回覧実記』におけるロシアの部分(61巻-65巻、『特命全権大使米欧回覧実記』岩波文庫 1980年、全5冊の四、21-110頁)をとりあげる。まず、ロシアに対する『回覧実記』のスタンスを使節団の全旅程において考察し、前半では久米の記述数箇所における事実誤認を正しつつ、その傍証とする。次に久米が『回覧実記』でまったく触れなかった「皇帝午餐会」の行事をロシア側の資料から検証することにより、今まで見えてこなかった岩倉使節団のロシア訪問の新局面を明らかにしたい。

## 2. 『米欧回覧実記』におけるロシアの位置

岩倉使節団の活動におけるロシアへの関与部分は他の主要諸国と較べてかなり軽少なものである。16日という滞在日数と首都サンクト・ペテルブルグー市のみの訪問は、日本とロシアの通交関係がアメリカとほぼ同時に始まったこと、すでに二回も日本政府(徳川幕府)より公式使節団が送りこまれている経過を考えると異例ともいえるであろう。

使節団の旅程実録である『米欧回覧実記』の記述はそれにほぼ比例して、ロシアに割かれた記述は約5パーセント(頁数)にすぎない。この比率は、しかし、成り行き的な旅の結果でもあった。この公式諸国歴訪旅行は当初より確固とした旅程配分が決められ、それに従ったものではなかった。そもそも使節団派遣の期間も10ヶ月程度と当初予定されていたのが、結果として2倍以上もの時間を費やすものとなっている。岩倉使節団自体が内容的には多くの未熟未定部分をかかえた研修旅行団的な性格を持っていたのであり、新生日本の若々しい国家的頭脳集団は「成長」しながら、紆余曲折のアメリカ・ヨーロッパの諸国歴訪の旅をくりひろげたのである。

人間の成長過程に例えるなら、使節団はアメリカにおいて青年期に向かう未熟な少年時

代を経験したといえるだろう。外交の現実もテクニックも知らず、空回りの観念と自身の無知ゆえに大きな蹉跌をきたした。自分たちの実力からすれば不平等条約改正など絵に描いた餅であることを彼らはアメリカで痛感せざるをえなかったのである。

アメリカでの失敗と反省は使節団を成長させ、青年となった使節団は謙虚に心を引き締めてイギリスへ渡る。イギリスで彼らはおおいい見聞学習し、徐々に自分を取り戻し、イギリスの現実や故国日本を見る力もつけてゆく。異国の風物を味わう余裕も出てきた。

その後、独仏戦争後のフランスを訪問して、敗戦国にもかかわらず、その豊かな生活と文化的な成熟度に瞠目し、ヨーロッパの歴史文化の奥深さを感知している。この頃彼らの旅も1年を超え、洋服姿もすっかり板につき、西洋の風物にもなじんできた。物腰も堂々たる大人となり、一国を代表する使節団としての風格もついてきていた。

ドイツでの滞在期間はあまり長くなかったが、彼らは大きな発見をする。1871年にプロイセンによって統一された新興ドイツ帝国は日本と類似するところの多い国であった。その重工業・軍事産業の勢いを目の当たりにし、鉄血宰相ビスマルクの演説に接して、使節団にはミッションの核心に触れたような昂りが生じている。

そのドイツから汽車で使節団はロシアへ入る。歴訪旅行も山を越し、ドイツでの達成感と長旅の疲労感を抱えて、1873年の3月末、春まだき寒いロシアへやってきたのだ。各国を巡るうち任地で使節団を離れる者や、派遣任務を終了して帰国する者などが相次ぎ、ドイツ滞在中には使節団構成員もぐんと少なくなり、出発当初約50人であった団員数は20人程になっていた。また、副使の大久保利通、木戸孝允に日本政府より帰国命令が下り、大久保はドイツの旅程を終えたところで、急遽帰国するため使節団を離れてゆく。木戸は旅行中意見が対立することの多かった大久保に同行することをよしとせず、ロシア訪問を終えてから帰国することにした。

使節団はこの時期、働き盛りから熟年期へ向かうところと言えるだろうか。経験と自信に裏打ちされて目も肥え、ロシアを見る目的的確、辛辣である。しかしつもる疲れからか『回覧実記』は平板な記述が多くなり、不注意による事実関係の誤りが目立ってくる。また、自信過剰気味の独断的な箇所もあり、『米欧回覧実記』のロシア部分はかなり慎重に読まれなくてはならない。ロシアは日本にとって距離的に最短のヨーロッパなのだが、西廻りで世界をめぐる結果、岩倉使節団にとっては「天涯万里ノ感ナキヲ得ンヤ」（『実記』四、47頁）と最遠最奥の国として表現されることとなったのである。

### 3. 『米欧回覧実記』におけるロシアについての記述

『回覧実記』のロシアの部分ですぐに気がつくのは、人名の間違が多いことである。開国後日が浅く、ヨーロッパ語を学んだことのない日本人にとって米欧諸国の地名・人名を正確に聞き取り、表記することは至難とも言えることであり、長くややこしいロシア人の名前がさらに不正確になるのはやむをえないことである。しかし、音の捉え難さからくるものではない取り違えや、不注意としか思えない誤りがしばしばあり、事実認識の混乱を物語っている。以下、事例を見てみよう。

### 到着時の混乱

使節団一行は1873年3月30日(露暦=ユリウス暦で3月18日)の夜、首都サンクト・ペテルブルグのワルシャワ線起点、ワルシャワ駅に到着した。そこでロシア政府より差し向けられた「ゼネラル、トレーボスグラフニー」、「ロイテナントコロネル、カタルスキ」、「メリニコフ」、「フロッセー」(『実記』四、46頁)各氏に迎えられた。しばしもてなされた後、使節団は馬車で宿舎に供された皇帝宮殿(冬宮)至近の「ホテルデフランセ」(『実記』四、47頁)に向かった。日本使節の全経費はロシア政府が負担した。

『回覧実記』の翌3月31日(露暦3月19日)の記述は天気を「微陰」と記した以外、「当府ノ知事「グラフ、ニイロ」氏来訪ス、」(『実記』四、57頁)の一行のみで、知事「グラフ、ニイロ」氏は謎のまま残されていた。これについては拙論「岩倉使節団、ペテルブルグへ」(2004 東京外国語大学「スラヴ文化研究」第3号)でも論じたが、久米の勘違いとロシアにおける認識・識別への意欲のなさを示すものである。

ペテルブルグの行政組織は複雑で、軍管区としての軍知事職と文民知事職があったが、現実に市政を握っていたのは1718年以来警察長官であった<sup>3</sup>。では、市の最高権力者である警察長官が使節団を表敬訪問したのかということ、実は警察長官のフョードル・フョードロヴィチ・トレーポフ(1809-1889)は日本使節団のペテルブルグ滞在接待責任者であり、昨夜ワルシャワ駅で彼らを迎えた「ゼネラル、トレーボスグラフニー」その人であって、不自然な記述となる。

英訳 *The Iwakura Embassy, vol. 4* の訳者である P. コーニッキ氏はその訳注において「知事グラフ・ニイロ氏」をペテルブルグの市会議長ニコライ・イヴァノヴィチ・ポグレボフではないかと言う。久米が「ニコライ」の最初の2シラブルを気に留めて、「ニイロ」にしたのだろうと<sup>4</sup>。確かに地方自治をになう市会の代表がペテルブルグ市を代表して遠来の賓客を表敬訪問をしたことはおおいに考えられる。しかし、ポグレボフはグラフ(伯爵)ではない。この疑問については、次にあげるペテルブルグの日刊紙「ゴロス(声)」露暦3月26日(4月7日)付けの記事がおおよその事情を示唆してくれる。

「最近ペテルブルグに到来した日本の使節たち、副宰相イワクラと大臣のキド、イト、ヤマグチ、およびサメシマは「サンクト・ペテルブルグ・ジャーナル」(仏語新聞—引用者)によると、数日前に大勢の随員を引き連れて警察長官・侍従将官のトレーポフ氏を訪問した。氏は彼らをにこやかに迎え、市内の名所を見物するようにと勧めて、彼の許の役人の一人である中佐のニロト伯爵(グラフ・ニロト)を使節団付きとした。訪問の翌日、警察長官は日本使節団にペテルブルグ市の消防訓練を披露したが、彼らはこの新しい光景を目にして少なからず興奮した。」<sup>5</sup>

つまり、トレーポフの部下の名、「グラフ(伯爵)・ニロト」(граф Нирото: graf Niroto)と「議長(ゴロヴァ)ニコライ」(голова Николай: golova Nikolai)が混同されたことがわかる。「r」と「l」音の判別能力の問題でもあったろう。

より深刻なのはトレーポフへの認識の問題である。トレーポフはロシア首都の行政を牛耳る、皇帝の側近政治家であった。日本使節団滞在中の露暦3月31日(4月11日)、ペ

## ロシアにおける岩倉使節団

テルブルグの初代特別市長官に就任してもいる。峻厳な保守政治家トレーポフはこの時代のロシアにとっても、また岩倉使節団にとってもきわめて重要な人物で、使節団のロシア滞在のキイパーソンなのだが、『回覧実記』の記述からはそれがまったく見えてこない。

4月1日、岩倉使節団は公式にロシア到着の挨拶をするため各所に出向いている。木戸孝允の日記には次のようにある。「四月朔日 晴十字過より外務卿ゴルチャッコルの宅に至り面會其より宮内長式部長ホリス長の處に至る宮内長の外皆面會せり」(『木戸孝允日記』二、339頁：日本史跡協会叢書75、1933年。以下『木戸』)つまり、宰相のゴルチャコフを訪問したのち諸官庁を回り、宮内大臣アドレルベルグ以外の式部長官リーヴェン、警察長官トレーポフに会っているのだ。対応する部分を『回覧実記』で見ると、「四月一日 晴露国政事堂ノ内ナル、外務省ニ至リ、外務長官「コルチャコフ」氏ニ応接ス、此人ハ十七ヶ年此要職ニアリテ、甚タ英名アル賢相ナリ」(『実記』四、58頁)となる。宰相外務大臣のゴルチャコフは外務省と大蔵省が入る参謀本部建物(「露国政事堂」)内に住居を構えており、この点は両者の記述に相違はないが、久米の記述では外務省だけの訪問となっている。

翌4月2日には日本人たちに消防訓練が披露された。久米は馬を使ったダイナミックな消防訓練のありさまを見て、「馬健ニシテ御馬熟ス、其疾駆ノトキニ当リ、颯風ノ旋回スルカ如シ」(『実記』四、63頁)とあざやかに描写している。

### 日露関係への無関心

4月1日の『回覧実記』では、使節団の宿舎に「其後同省亜細亞寮ノ長官「モーヒー」氏(ストレモウーホフ引用者)来訪シ、兼テ前年皇太子「グランド亜歴山[アレクサンドル]大殿下、日本国ニ遊歴ノトキ、厚キ款待ヲウケタルコトヲ謝セリ、」(『実記』四、58頁)とあり、久米は日本を訪問したアレクサンドルⅡ世(在位1855-1881)の四男アレクセイ大公を二男で皇太子のアレクサンドル大公(次帝アレクサンドル三世、在位1881-1894)と取り違えるという大きな間違いをする。また、使節団の帰国後提出された復命文書中の『謁見式』においても、皇帝アレクサンドルⅡ世の言葉として、「朕カ次子曾テ汝ノ国ニアリテ厚ク礼遇ヲ享ケ」(『実記』四、校注、414頁)と記録されている。この誤りはすでに指摘されてきたところであるが<sup>6</sup>、アレクセイ大公と日本および岩倉使節団の関わりをさらにくわしく見てみよう。

実はアレクセイ大公は岩倉使節団と同時期にアメリカを訪問しており、約2ヶ月滞米期間を同じくしていた。アレクセイ大公の訪米は、1863年の南北戦争でアレクサンドルⅡ世がリンカーン大統領を支持して、ロシア艦隊をニューヨーク港へ派遣し、英仏軍を牽制したことへ感謝を表すためグラント大統領が招待したものであり、彼は訪米した最初のロシア皇族であった。東西2国からの対照的な珍客の来訪は当時のアメリカのマスコミをおおいに沸かせたのであった。

使節団は4月9日に皇太子夫妻の住むアニチコフ宮殿へ謁見に出向いて本人に会っており、『実記』4月9日の項にも「午後ニ、皇太子「グラウンデューク」歴山[アレクサンドル]

## ロシアにおける岩倉使節団

大公ニ謁見ス」(『実記』四、90頁)と書かれている。使節団の訪露時、アレクセイ大公はまだロシアに帰着していなかったのである。久米が日本に帰ってから自分の誤りに気がついていないのが訝しい。

アレクセイ大公の航海は訪米後予定を変更して世界周航となり、日本にも立ち寄った。20歳の明治天皇は日本を訪れた二番目の外国皇族である2歳年長のアレクセイ大公と親しく接している。また、大公の教育監督官としてこの旅行にも随行していたK.H.ポシエトは、明治天皇が横浜へロシア艦を訪れたようすを詳しく本国に報告し、ロシア海軍の新聞「クロンシタット報知」(露暦1873年1月24日付)で報道されている<sup>7</sup>。ポシエトは1853年来航したプチャーチンの有能な副官であり、1856年、日露和親条約批准書交換の際にはロシアの全権代表として来日し、日露関係史に名を残す人物であった。

もう一人、久米に書きとめられなかった日本経験者がいる。4月12日に日本使節団が視察に出向き、50トンの巨大ハンマーやウィーンの万国博覧会に出品する大砲の搬出を見て、久米がドイツのクルップ社に匹敵すると書き留めたオブホフ製鉄工場の最高責任者、A.A.コロコリツォフである。『木戸孝允日記』の4月12日の項には「此製造にて案内をせし仁は曾てプチャーチンと下田へ来たりしものなり帰り懸け同氏の宅にて中食を認む」(『木戸』二、347頁)とあり、当然使節団一行中で話題となったと想像されるのだが、『回覧実記』同日の「「オブスユース」氏ノ製鉄場」(『実記』四、102頁)の記述には出てこない。コロコリツォフはプチャーチン配下の海軍将校として若き日、下田に来日した。1854年にロシア艦「ディアナ号」が安政の大地震による津波のため沈没したことから、ロシア人たちの帰国のために日本で最初の洋式帆船が戸田村で造られることとなった。その際、スクーナ船「ヘダ号」建造の陣頭指揮者として日本人の船大工たちを指導したのがコロコリツォフであった。日本側の資料にも「コロコルチュノ」、「コロコルチョフ」、「コロポリチョフ」としてその名が見られる人物である<sup>8</sup>。このように『回覧実記』には不注意や無関心が散見され、同時代人である久米邦武のロシアへの関心のありようが窺われるのだ<sup>9</sup>。

#### 4. 書かれなかった皇帝午餐会

岩倉使節団の日録として久米が書き残さなかった重大な行事に、4月9日(露暦3月28日)に行われた皇帝午餐会がある。外国を公式訪問する国家使節はまず元首に謁見し、そのち元首より正餐に招待されるのがしかるべき順序である。岩倉使節団もすでに米欧諸国で王宮等における幾多の正餐会食を経験し、そのことは『米欧回覧実記』にもほとんどもらさず記録されている。最初の訪問国アメリカでの、グラント大統領主催によるホワイトハウスの晩餐会は次のように活写されている。「凡西洋ノ俗、享燕ニハ殊ニ敬礼ヲ致スコトニテ、以テ交際ノ大節トナス、主賓必ス夫妻相携ヘテ席ニ臨ムヲ礼トナス」(『実記』一、210頁) ロシアの次の訪問国であるデンマークについても、「(4月19日)六時ヨリ、再ヒ王宮ニ於テ、皇帝及ヒ「ルイセ」皇后ト同案ニテ、「デンネル」ヲ賜フ、食饌美ヲ尽シ、三百十七年前ノ古酒アリ」(『実記』四、146頁)と書かれている。

午餐はロシアの正餐であり、アレクサンドル二世主催の宮中午餐会は日本使節団にとつ

## ロシアにおける岩倉使節団

て謁見につぐ第二の重要公式行事であったはずである。以下、この行事を主にロシア側の資料で見てゆく。

3月29日(露暦)付のロシア政府の官報につぎのような告知が載っている。「宮中報知：この3月28日、午後6時半に冬宮において皇帝午餐会が催された。日本使節団のメンバーが招待され、通訳が伴われた。また、国家評議会と皇帝側近のうちより幾名かが夫人同伴で招待された。」この記事はそのまま3月30日(露暦)付の一般紙「サンクト・ペテルブルグ報知」紙や同日付「取引所報知」紙に転載されている<sup>10</sup>。

4月9日(露暦3月28日)の日本使節団の行動は『回覧実記』では、午後皇太子に謁見してから、「育嬰院」(棄児養育院)の見学におもむき、「聾啞院」も見学する。これら施設の、特に「育嬰院」の観察は仔細な力のこもった記述となっている<sup>11</sup>。しかし、夕刻からの行事には何もふれていない。久米自身は招待メンバーに入らなかったのだろう。木戸日記を見てみると、同日は忙しい一日の様子をくわしく書き残しており、「五時半より帝宮に至る則晩食の招なり余は中宮と對して席につけり同食するもの百餘人食物總て佳なり」(『木戸』二、346頁)とある。

ロシアの食事習慣は中食(昼食)が3食中最も尊重され、ディナーと見做せるものである。一般に昼食の時間は遅く、19世紀末から20世紀初めに官吏が午後4時過ぎに役所から帰宅して昼食を取っていた記録がある<sup>12</sup>。6時台は公式昼食会の時間帯であった。したがって朝食も遅く、4月3日のアレクサンドル二世謁見式のあと2時前後に使節団に饗された「略饌」(『実記』四、68頁)は朝食(фрыштик вроде обеда = 昼食に類した朝食)であった。このことを木戸は「食堂へ案内し中食を饗す三字前歸寓」(『木戸』二、340頁)と書いており、使節団の日本人は朝食を昼食、昼食を夕食と日本流に理解していたことがわかる。

この日、使節団は夕刻から冬宮へおもむき、皇帝午餐会に与った。その次第はロシア皇帝の日録に次のように記録されている。

「 28 (露暦3月28日—引用者) 水曜日

[(←左欄外に) 日本使節団のために「白い広間」で午餐会]

6時に皇帝午餐会への招待者たちの受付。夫人方は襟ぐりの大きい黒いドレス、紳士方は軍人は通常の礼服で綬はつけず、文民の諸氏は正装に綬を付け、「金色の客間」に集まった。6時15分、皇帝陛下が殿下と「白い広間」へお出ましになられ、つぎの順で席に着かれた。

皇太子殿下、 皇太子妃殿下

ニコライ・ニコラエヴィチ大公殿下

アレクサンドラ・ペトローヴナ大公妃殿下

ミハイル・ニコラエヴィチ大公殿下

オリガ・フョードロヴナ大公妃殿下

ゲルツォク・メクレンブルク・ストレリツキー殿下

## ロシアにおける岩倉使節団

プリンツ・ピョートル・ゲオルギエヴィチ・オリデンプルクスキー殿下  
プリンツ・ニコライ・ペトロヴィチ・オリデンプルクスキー殿下  
プリンツ・コンスタンチン・ペトロヴィチ・オリデンプルクスキー殿下  
プリンツェッサ・テレージア・ペトロヴナ・オリデンプルクスカヤ殿下  
日本大使 シオニ・トモミ・イヴァクラ、  
副使 ユサミ・タカユチ・キド、ユズチ・ヒロブミ・イト、ユズチ・マスカ・  
ヤマグチ  
パリおよびベルリン駐在公使 サメシマ、その他

午餐の終わったのち、皇帝陛下、皇族殿下方、およびその他の方々は「金色の客間」へ移られ、そこでコーヒーとリキュールが供された。

午餐会招待者数	107人
辞退数	19人
午餐会出席者数	88人

夜の集いは催されなかった。

〔(左欄外に注記—引用者) 会食には軍楽隊の二つのコーラスがついた。

宮廷勤務者たちは舞踏会用の制服を着用した。

白の広間と金色の客間に照明が点けられた。

テーブルは広間一杯の長さに設置された。

装飾はロンドン風である。

給仕は午餐会のために喪服をはずした。〕<sup>13</sup>

資料を詳しく読み込んでいこう。午餐会が用意された「白い広間」、「金色の広間」は冬宮の中で最も格の高い部屋であり、4月3日に謁見式が行われた広間である。ロシア側参会者の女性の服装については、ミハイル・パーヴロヴィチ大公（パーヴェル一世の四男）の未亡人、エレナ・パーヴロヴナ大公妃（ドイツ・ヴェルテンベルク王家出身）がこの年の露暦1月9日に逝去しており、ロマノフ家はまだ服喪中であったゆえだろう。注記部分の給仕の制服でもそれがわかる。

アレクサンドル二世が皇族「殿下」императорское высочество (royal highness) たちを従え、日本使節団の客人をともなって「白い広間」へ現れ、皇帝から順次席につく。皇帝家の皇子女では皇太子アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ大公夫妻のみの出席となっている。

ここでロシア皇族の称号である大公について。大公 великий князь は英語では grand duke と訳され、久米の理解もそれによっていることがわかる。ロシアでは1873年の時点では皇帝の嫡出男性子孫に与えられた称号である<sup>14</sup>。既婚の女性子孫と大公の妃は великая княгиня となるが、未婚の場合は великая княжна である。既婚女性の称号



## ロシアにおける岩倉使節団

をあらわすとき、日本語では往々にして「大公妃」、「大公夫人」と訳されがちであるが、未婚・既婚（配偶者の称号に関わらず）を問わず「大公女」、大公の同等婚の配偶者は「大公妃」と訳すべきであろう。称号は男系で伝わり、女性の称号と権利は次代へは継承されない。

木戸が隣に坐った「中宮」（『木戸』二、346頁）とは誰であろうか。中宮は皇后と解されるべきはずだが、皇后出席の記述はない。これより11年前にロシアに来た竹内使節団はアレクサンドル二世とともにマリヤ・アレクサンドロヴナ皇后に謁見することができたが、その後、皇帝夫妻の関係に変化が生じ、皇后の健康状態も悪化して、この二人が同席する機会は少なくなっていた。また、竹内使節団が同時に拝謁した皇太子はアレクサンドル大公ではなく、長男のニコライ・アレクサンドロヴィチ（1865年没）であった。1873年3月、皇后は南イタリアの海浜都市ソレントで結核の身を保養しており、「中宮」とは皇太子妃を指していると考えられる。木戸は4月9日の冒頭に「曇又晴十二字太子の宮に至る太子夫人に面謁す終て茶酒菓を別室にて饗あり」（『木戸』二、344頁）と書いており、彼が皇太子妃マリヤ・フョードロヴナに会うのはこの日二度目である。皇太子妃はデンマーク、グリュクスブルク王家の出身で、クリスチアン九世の二女である。姉のアレクサンドラはイギリスのハノーヴァー王家に嫁ぎ、ヴィクトリア女王の長男、皇太子エドワードの妃であった。

アレクサンドル二世の皇子たちのうち三男のヴラジーミル大公はこの時母皇后への同行から帰国の途次にあり<sup>15</sup>、四男のアレクセイ大公は世界就航からまだ帰着していなかった。皇帝家にはそのほか MARIA 大公女、五男セルゲイ大公、六男パーヴェル大公と三人の子女がいたが、いずれも参会していない。

ニコライ・ニコラエヴィチ大公（1831-1891）はアレクサンドル二世の二番目の弟で、その次のアレクサンドラ・ペトロヴナ大公妃は彼の妻である。翌4月10日、日本使節団はその宮殿に拝謁に出向いているが、そのことは久米、木戸ともに次のように書いている。

「十二時ニ「グラウンデューク、ニコラス」公ニ謁見ス、公ハ皇帝ノ次弟ニテ、陸軍ノ大将タリ」（『実記』四、95頁）、「十二字帝の弟ニコラス皇族の宅に至り面謁す夫人も同席なり當時陸軍の総長を務めりその宮殿に別室にて茶酒菓の饗あり」（『木戸』二、346頁）。ロシアでは皇族の男子に生まれると、幼少より陸・海軍に登録され、位階を昇り始めるのだが、ニコライ大公は1867年に「近衛ならびにペテルブルグ軍管区総司令官」に任命され、国家評議会のメンバーでもあった。

ニコライ大公夫妻の次に書かれているのが皇帝の末弟、ミハイル・ニコラエヴィチ大公（1832-1909）とバーデン大公家出身のオリガ・フョードロヴナ大公妃。ミハイル大公は1862年よりカフカス総督、カフカス軍総司令官に任命されており、同じく国家評議会議員で、1881年からは議長を務めている。

次の「ゲルツォク・メクレンブルク・ストレリツキー殿下」について。「ゲルツォク」はドイツ語の「公」をそのまま敬称としたもので、ロマノフ家の大公女と結婚し、一家をなしてロシアに住み着いているドイツ領邦王家出身の男性につけられていた。メクレンブル

ク・ストレーリツ大公家のゲオルク・アウグスト公は故ミハイル・パーヴロヴィチ大公とまだ喪の明けていないエレナ・パーヴロヴナ大公妃の三女エカテリーナ大公女と 1851 年に結婚したが、ミハイル大公家ではこのときまでに他の 4 人の子供をすべて亡くしており、ゲオルクはロシアの皇族の家庭へ入り婿のようなかたちで入っていたのだ。しかし、彼は「大公」の称号は有さず、厳密にはロシア皇族の一員ではない。「殿下」の称号も正確に言えば、他のメンバーとは違って、*великогерцогское высочество* (grand duke's highness) である。午餐会に欠席している彼の妻は、結婚してドイツの「公妃」(герцогиня) であるが、ロシアの「大公女」(великая княгиня) であり、上述の二人の大公妃と同一の称号ながら「大公妃」ではない。

その下を見ると次の皇族 4 人もやはり大公ではなく、「プリンツ」または「プリンツェッサ」という称号を持っている。これもまた、ドイツ語の「王子」、「王女」をロシア語化したもので、ロシア・オリデンプルクスキー家の人々に対しての敬称であった。その姓から知れるごとく、オリデンプルクスキー家はドイツのオルデンプルク公 (ウィーン会議の後に大公) 家に発するものである。

オリデンプルクスキー家で最初にあげられているピョートル・ゲオルギエヴィチは当主で、以下三人の父親である。夫人のテレジヤは 1871 年に他界している。次のニコライ・ペトローヴィチは長男で、コンスタンチン・ペトローヴィチは四男、テレジヤ・ペトローヴナは四女となる。さらに、皇族で 4 番目に名のあがっているニコライ大公の妻、アレクサンドラ・ペトローヴナ大公妃はピョートルの長女なのである。このように、11 人の皇族中じつに 5 人までもがオリデンプルクスキー家の人々であることがわかる。

日本使節団がピョートル・オリデンプルクスキーに会うのはこの日が初めてではない。4 月 6 日 (露暦 3 月 25 日) に夏の庭園の隣にあるその宮殿を訪問して拝謁し、接待を受けているのだ。木戸はこの事実を正確に「三字よりヲルデンフルフに面謁す少時談話然る後別席にて茶菓を饗す」(『木戸』二、342 頁) と記しているが、久米は不注意で訪問先の変更気づかず、「「グランヂューク、コンスタンチン」公ニ謁ス」(『実記』四、79 頁) と誤って書き、日本使節団のロシア滞在に少なからぬ関与を持ったピョートル・オリデンプルクスキーの名が『米欧回覧実記』によって日本で知られることはなかったのである。<sup>16</sup>

では、ロシアのオリデンプルクスキー家とはどういう存在で、家長のピョートル・ゲオルギエヴィチとはいかなる人物であったのか。

## 5. オリデンプルクスキー家とピョートル・ゲオルギエヴィチ・オリデンプルクスキー<sup>17</sup>

中世、ドイツ北西部オルデンプルク周辺の支配者はドイツ沿岸に住み着いた異教のフリジア人との抗争にあけくれ、13 世紀には十字軍に参加した。オルデンプルクの支配者は伯を称し、16 世紀には神聖ローマ帝国の議会に参加する権利を得る。17 世紀、フリジア人の最後の領土を国土に加え、支配貴族層の特権もそれほど甚だしくなく、比較的豊かな農民層をもつ領邦国家として発展してゆき、オルデンプルク家はさまざまな系統に分かれていった。ロシアに入ってゆくオルデンプルク家の人々はすべてホルシュタイン・ゴットル

## ロシアにおける岩倉使節団

プ系（デンマーク国王フレゼリク一世となったシュレスヴィッヒおよびホルシュタイン公の三男〔1586年没〕が始祖）であるが、ロシアの皇帝家自体が西欧流に言えば、ロマノフ・オルデンブルク・ホルシュタイン・ゴットルプと称されてもおかしくはないのである。

それはピョートル一世（1682 - 1725）の娘、アンナがホルシュタイン・ゴットルプ公カール・フリードリヒと結婚したことから始まる。カール・フリードリヒはデンマークからシュレスヴィッヒを奪還するため度々ロシアに援助を求めていた。二人の間に生まれたカール・ペーター・ウルリヒは父の母がスウェーデンのカール十二世の姉であるため、スウェーデンの王位に対する権利も有していたが、1742年母方の叔母、ロシアのエリザヴェータ女帝（1741 - 1761）に後継者として指名され、1762年ロシア皇帝ピョートル三世（1761 - 1762）となった。

カール・ウルリヒの叔父筋にあたるゲオルク・リュドヴィクはロシアに呼ばれ、ホルシュタイン部隊の指揮にあたる。ピョートル三世にとってはロシアよりも生まれ故郷のホルシュタインの方が重要で、代々の悲願であるシュレスヴィヒ奪還をめざしていた。ピョートル三世が即位して半年で廃位され、その妻がエカテリーナ二世（1762 - 1796）として即位するにおよんでゲオルク・リュドヴィクはロシアを去っていった。ロシアの女帝となったエカテリーナも母がホルシュタイン・ゴットルプの公女で、ピョートル三世とは又従兄妹であり、ゲオルク・リュドヴィクは母の弟であった。ゲオルク・リュドヴィクの二人の息子はロシアに残され、エカテリーナ二世の監督下で教育されることとなる。海軍に属した兄は若くしてエストニアの湾で溺死したが、陸軍勤務の弟ピョートルはドイツ・ヴュルテンベルクの皇女フレデリカと結婚した。フレデリカはエカテリーナの皇太子パーヴェルの妃マリヤ・フョードロヴナと姉妹であった。フレデリカが二人目の息子を産んで亡くなった後、ピョートルはオルデンブルクを統治するためにロシアを去ってゆくが、息子たち二人はロシアに残された。

アウグストとゲオルクの兄弟はマリヤ・フョードロヴナの庇護のもとに育てられ、ともにライプツィヒ大学で学ぶ。兄はロシアで軍務についた後、父祖の地へ帰り、オルデンブルク大公となった。

弟は1809年4月にパーヴェル一世（1796 - 1801）とマリヤ・フョードロヴナの四女、エカテリーナ大公女と結婚した。ナポレオン戦争でヨーロッパ全体が震撼していた時代であった。フランス皇帝となったナポレオンは新しい皇統の恒久王族化を願ってヨーロッパの王家から新しい妻を捜していたが、まずロシア・ロマノフ家に狙いを定め、内々にエカテリーナを望んできた。パーヴェル一世の十人の子供の中で際だって聡明で、強い性格を持ち、兄アレクサンドル一世（1805 - 1825）の相談相手であったエカテリーナはそれを拒み、母の皇太后は急遽甥にあたるゲオルク・オルデンブルクと結婚させたのである。ここからロシア・オリデンブルクスキー家の歴史が始まる。

ナポレオンはなおもロマノフ家に執着を持ち、公使コレンクールを通じて今度は末娘のアンナとの縁組を求めてくるが、ロシア側は煮え切らない態度を示すばかりだった。アレクサンドル一世と母皇太后、姉エカテリーナの作戦であった。ロシアの意図を察知したフ

## ロシアにおける岩倉使節団

ランス皇帝は 15 歳のロマノフの娘から 18 歳のハプスブルクの皇女へと方向転換する。1810 年はじめのことである。

ボナパルト家とロシアの縁は、しかし、ナポレオン没後に生じてくる。ナポレオンの義理の息子であるイタリア副王ウージニー・ボガルネ（ジョセフィーヌの息子）とバヴァリア王女の息子マクシミリアンがニコライ一世(1825 - 1855)の長女マリヤ大公女と結婚し、ロシアにやってくるのである。1839 年の結婚と同時に「殿下」の称号とペテルブルグの中心に広大な「マリヤ宮殿」を与えられ、彼は「レイフテンベルクスキー公家」を成して、生涯ロシア皇族のなかで過ごし、多くの子供を残した。

ゲオルク・オリデンブルクスキーは詩をつくり、文芸を愛す人物であったが、交通関係の最高担当者として国務に従事し、ペテルブルグに交通工学の専門学校を設立し、運河網の改良と水上交通の法整備につくした。また、軍知事としてトヴェリ、ノヴゴロド、ヤロスラヴリの管区の統治に携わった。当時ロシアはナポレオンのロシア侵攻への対応で大混乱をきたしており、前線へ送る兵員や糧秣の調達につくした。その活動拠点をヤロスラヴリに移した 1812 年、二男のピョートルが生まれて 4 ヶ月でゲオルクは激務のため突然亡くなってしまった。

父を亡くしたアレクサンドル、ピョートルの兄弟はペテルブルグで祖母のマリヤ・フォードロヴナ皇太后の庇護のもとにおかれるが、母がヴェルテンベルクのウィルヘルム公と再婚するにあたって、息子たちもシュトゥットガルトへ連れられてゆく。しかし、1818 年末に母も亡くなり、彼らは祖父のオルデンブルク大公のもとに送られて、ドイツで教育を受けた。人文科目を主として、特に外国語教育に力が入れた。ピョートルは古典語によく通じ、8 言語の素養を積んで、仏、独、英、露語を使いこなした。

1829 年に祖父と兄を亡くし、その一年後にロシアに帰るまでピョートルはオルデンブルクで 12 年の歳月をすごした。肉親を相次いで亡くした不幸な年にピョートルは、トルコから解放された新生王国ギリシアの国王候補として推されたが、結果的にはロンドン議定書によりデンマーク王家からギリシア王が立つこととなった。

ロシア皇帝ニコライ一世に呼ばれてロシアに帰ったピョートル・オリデンブルクスキーは勉学を続けながら軍務につき、順調に位階を上っていく。しかし、彼の穏やかで父譲りの人間的な性格には軍事畑は向いていないことを早くに悟ったようである。ピョートルも文学・芸術を愛し、社会の福利・教育により関心を持つ性向にあった。1834 年元老院議員に任命され、1836 年には国家評議会の議員となり、ロシアでの地位が固まってゆく。

1837 年、オルデンブルク家とナッサウ家の結婚契約がまとまり、ピョートルはナッサウ公国の公女テレジヤとドイツで結婚する。二人は新婚旅行にバーデン、シュトゥットガルト、ワイマール、ベルリン、リュウベックと周り、ニコライ一世差し回しの汽船『ヘラクレス号』でサンクト・ペテルブルグに帰着し、ロシアを故国とする生活に入ってゆく。

1845 年、ニコライ一世より「殿下」императорское высочество (royal highness) の称号を与えられ、このことにより、オリデンブルクスキー家のロシア皇族の中における地位が確定したと考えられる。ピョートルはロマノフ家とは濃厚な血縁関係にあったが、

大公ではなかった。オリデンプルクスキー家は皇族の持つ「殿下」という称号が与えられることによって、レイフテンベルクスキー家と同等の、帝位継承順位には入ることのない「二次的な」皇族一家となったのである。

## 6. 岩倉使節団とピョートル・オリデンプルクスキー

ここで『米欧回覧実記』4月9日の記述を見てみよう。親の素性を問わず、捨て子を受け入れて育てる「育嬰院」の視察の仔細な記録（『実記』四、91-93頁）が書かれている。『木戸日記』にも「棄児院」（『木戸』二、344-345頁）としての記述がある。この施設の最高行政責任者であり、個人的にも深く関わり、庇護者となっていたのがピョートル・オリデンプルクスキーであった。ロシアの孤児養育施設はエカテリーナ二世の治世にイヴァン・ベツコイ（1704-1795）の構想によって興され、19世紀後半にはヨーロッパでも特筆される国家的福祉事業となっていた。ベツコイのつくったモスクワ、ペテルブルグ両首都の孤児院は1797年より皇后マリヤ・フョードロヴナのもとに置かれ、その後他の福祉・教育施設と共に「皇太后マリヤ官庁」の管轄となった。ピョートルは1860年に「皇帝陛下官房第四課」<sup>18</sup>の総統括者に任命されて、マリヤ官庁の施設のすべてを委ねられていたのである。日本使節団は4月6日にオリデンプルクスキーの宮殿を訪問しているが、それはかつてベツコイ邸であった。イヴァン・ベツコイと同じく孤児であったピョートル・オリデンプルクスキーが「育嬰院」へ注ぐ熱意の深さを窺うことができる事実である。

ピョートル・オリデンプルクスキーが革命前のロシアの教育・福祉に果たした役割は並外れたものであった。欧米に較べて法意識の低いロシアの状況を憂え、1835年に自らの資産で国家の必要とする法律教育を担う専門学校を創設し、終生それを支え続けた。また、一貫して恵まれない児童を庇護し、養育・教育施設や小児病院をつくり、それらの多くは現在にも引き継がれて機能をはたしている。皇帝官房第四課の下の福祉施設は1844年には104でしかなかったが、ピョートルの亡くなった1881年には496にもなっていた。彼はロシア皇室のマージナルな立場にあって、ドイツ人と言われつつ、ドイツ・オルデンプルク家の宗旨であるルター派の信仰を捨てず、それにもかかわらず、当時のロシア社会で最大の敬意が払われていた人物であった。岩倉使節団の人々が複雑に絡み合うヨーロッパ王家の血脈が凝縮した、この傑出したロシア皇族とさまざまに交わった事実は新たに知っておくべきであろう。

『米欧回覧実記』には記録として残らず、日本側の注意を引くところとはならなかったが、皇帝午餐会の皇族参会者のメンバーに見られるオリデンプルクスキー家の比重の大きさは注目されてよい。これはこの時代のロシア皇室の状況を端的に表しているからである。ロマノフ家は1797年にパーヴェル一世が「皇室法」 *Учреждение об императорской фамилии* を制定することによって、それまでの皇位継承をめぐる混乱や政変を一切絶つことができた。パーヴェル一世の定めた皇位継承法は女系を絶対的に排除するものではないが、男系長子優先の原則を持ち、それは代々ドイツ圏より興入れしてきた多産な皇妃たちによって支えられてきた。1873年当時、皇帝家、皇太子家以外に大公として一家を構え

ていたのは先代ニコライ一世の息子たちのコンスタンチン、ニコライ、ミハイルの3家であった。この大公家から多くの子供たちが生まれ、1880年代からロマノフ家は爆発的に肥大するのであるが、1870年前半は第三世代の大公、大公女たちはまだ年少で、オリデンブルクスキー家のような例外的に皇室に迎えられた母系親族の役割に負うところが大きかったのである。

別の観点からは、大公たちの姿が比較的少なかったのは、日本使節団のなかに皇族がいなかったという事実も影響したであろう。ロシア人にとって日本の王者はミカドであり、ミカドという言葉はロシアですでに王族の神秘性を帯びていた。しかし、岩倉使節団にはミカドの遠縁の親族すら加わっておらず、貴族と見做されるのも副首相格の大使岩倉具視一人であった。遠い極東の新生王国に対して礼を失することなく、それとなくレヴェルを合わせた会合となったのがこの皇帝午餐会であり、大公たちの出席の少なさと、それを補うようなオリデンブルクスキー家の人々の員数となったのではないだろうか。

また、すべて日本式を通した最初の日本使節である竹内使節団(1862年)に比べ、使節団全員の出で立ちも西洋風になり、ロシア社会においてもエキゾチックな日本への関心が沈静化していたことも見逃せない要因と考えられる。

結びにかえて

名高い岩倉使節団の米欧歴訪体験は将来の日本の方向性を定め、現代日本を形成してきた決定要因の一つともみなされるものである。日本とロシアの関係においても、18世紀末からの交流の中で、岩倉使節団のロシア訪問はその後の流れに大きな影響をあたえるものであり、現在の日露関係にもそれは及んでいる。しかし、使節団のロシアでの行動はこれまで『米欧回覧実記』の記述を出るものではなかった。本論は『米欧回覧実記』を再検討し、ロシア側の資料からそこに記されなかったいくつかの事実を掘りおこし、新たに使節団の行動を見てゆくことを通して、岩倉使節団の実像に近づくべく試みたものである。

---

[注]

<sup>1</sup> 大久保利謙編(1976)『岩倉使節の研究』宗高書店、西川長夫他編(1995)『『米欧回覧実記』を読む』法律文化社、田中彰・高田誠二編(1993)『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会、イアン・ニッシュ編(2002)『欧米から見た岩倉使節団』ミネルヴァ書房、田中彰(2002)『岩倉使節団の歴史的研究』岩波書店、米欧回覧の会編(2003)『岩倉使節団の再発見』思文閣出版、芳賀徹編(2003)『岩倉使節団の比較文化史的研究』同朋舎、等参照

<sup>2</sup> Pantzer Peter (2002) Die Iwakura-Mission. Das Logbuch des Kume Kunitake über den Besuch der japanischen Sondergesandtschaft in Deutschland, Österreich und der Schweiz im Jahre 1873. Ludicium Verlag.

<sup>3</sup> サンクト・ペテルブルグの首長的役職名：軍知事 генерал губернатор, 文民知事 гражданский губернатор, 警察長官 обер полицмейстер, 特別市長官

---

градоначальник

<sup>4</sup> The Iwakura Embassy 1871 1873, vol.4 (2002, Japan Document) Continental Europe 2, tr. By P.F.Kornicki, Notes by tr. P.47.

<sup>5</sup> First Japanese Embassies in Russia, in newspaper publications 1862 1874, ed. by Bannai T., Zubovskaja V. et al. (2005) Saint Petersburg, p.77.

<sup>6</sup> 田中彰 『米欧回覧実記』四、校注 414頁。

<sup>7</sup> Кронштадтский вестник, 1873.1.24(2.5), №11.: First Japanese Embassies in Russia, p.131.

<sup>8</sup> 『ヘダ号の建造』(1979) 戸田村教育委員会

<sup>9</sup> その他、日刊紙「ゴロス (声) Голос」露暦 1873 年 4 月 2 日 (14 日) 付紙面で使節団が露暦 3 月 31 日、陸軍の地図製作部を視察し、そこで『日本見聞記』(1869)、『日本列島概観』(1871)の著者である、地理学者、旅行家の V.ヴェニニコフと会い、歓談したことが仔細に報じられているが、日本側資料では確認できていない。

<sup>10</sup> 皇帝午餐会の報道：官報 Правительственный вестник, 1873.3.29(4.10)

Санкт・ペテルブルグ報知 Санкт Петербургские ведомости, 1873.3.30.

取引所報知 Биржевые ведомости, 1873.3.30.

<sup>11</sup> 坂内知子 (2001)「Санクト - ペテルブルグにおける岩倉使節団—『米欧回覧実記』における「育嬰院」の記述をめぐって」『神田外語大学異文化コミュニケーション研究』13号、83-101頁。

<sup>12</sup> Светлов С.(1998) Петербургская жизнь в конце XIX столетия, СПб. ст.20.

<sup>13</sup> ЦГАНХ, Камер Фурьерские журналы, Ф.516,1873г.д.52. лл.118 120.

<sup>14</sup> Кузьмин Ю.(2005) Российская императорская фамилия, СПб.

1885 年のアレクサンドル三世の勅令および 1886 年の新「皇室法 Учреждение об императорской фамилии」により、大公 (大公女) のタイトルは皇帝の子、孫までに制限された。

<sup>15</sup> 露暦 4 月 1 日 (13 日)、父皇帝に帰国の挨拶に出向いている。ЦГАНХ, Камер Фурьерские журналы, Ф.516, 1873г. д.52. л.123.

<sup>16</sup> 式部長官リーヴェンへの、露暦 1873 年 3 月 24 日付けコンスタンチン大公家よりの書状と同日付けオリデンブルクスキー家よりの書状があり、前者は日本使節団の訪問を断り、後者は承諾している。ЦГАНХ. Ф.473, опись 1, дело 1498.

<sup>17</sup> 主たる資料：Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона, т.42 (1897), СПб. (Терра 1992) ст.914- 916, Анненкова Э. Голиков, Ю.(2006) Принцы Ольденбургские в Петербурге. СПб., Федорченко В.(2003) Дом Романовых. Москва, Кузьмин Ю.(2005) Российская императорская фамилия, 橋本淳編 (1999)『デンマークの歴史』創元社。

<sup>18</sup> 皇太后マリヤ官庁：Ведомство императрицы Марии

皇帝陛下官房第四課：4 отделение собственной Его Величества канцелярии